



1月号

ひだまり

今月のエッセー

ナンテン



大寒の名のとおり、朝晩の冷え込みが特に厳しく感じられる今日この頃。私のお寺の境内では、真っ赤に熟れたナンテンの実が、朝露も凍るほどの気温の中で可愛らしく身を寄せ合っています。

細い枝先に小粒の赤い実がつくことが特徴的なこのナンテン。門松や注連縄しめなわなどのお正月の飾りの中で、みなさんも一度は目にすることがあるのではないのでしょうか。昔から「ナン（難）をテン（転）じて福となす」縁起の良い植物だとされ、人々から愛されてきました。江戸時代になると、ますます縁起物として尊ばれるようになり、魔除けや火除けとしても人

気を博したそうです。

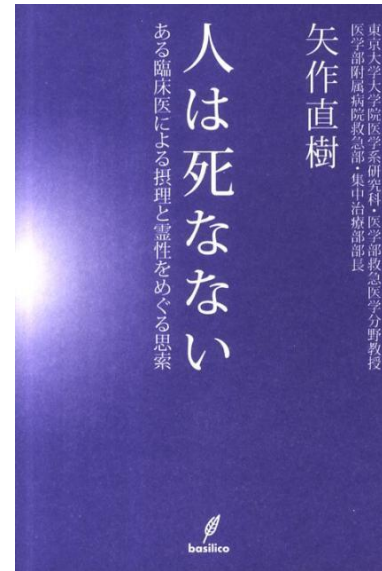
私のお寺でもお正月の飾りの中でナンテンを用います。今年は松と梅と菊の花をナンテンと一緒に活けて飾りました。落ち着いた色合いの中に愛くるしい赤い実がスツと入るだけで、新年の門出を穏やかに祝う縁起物として、全体がまとまるように感じます。

そんな紅一点のナンテンですが、難点もひとつ。松の内を過ぎる頃にもなると、熟れすぎた赤い実がコロコロと落ちてくるのです。小さい実ですから、床に転がってしまうとなかなか気づくことができません。「あっ」と思った時には、踏み潰してしまうこともしばしば。多い時には、五つも六つも転がっていることがあります。

毎年起こるこの片付けを面倒臭いなあと感じることもあります。しかし今では、この転がったナンテンの実たちが、誰かの「難を転じて」くれた証なのだと思うので掃除をするようにしています。ルンビニ合掌苑の皆様の難もまた、福に転じたことを願って。今年もよろしくお願ひ申し上げます。

◆山内弾正やまうちだんしょう

ひだまり書房



人は死なない

ある臨床医による摂理と霊性をめぐる思索
 著 やはぎなおき 矢作直樹

この本の著者は、実際の医療現場で活躍している救命医師です。先端科学を駆使して人命を救う医者が、とても科学的に証明できないような体験を通して人の生を説いています。

その一つが、母の霊との会話です。ある靈感の強い人に、「あなたのお母さんが息子に伝えたいことがあるらしいの」と話を持ち掛けられ、死別した母の霊と会話が行われます。著者本人にとっても信じ難いことでしたが、その体験以来、魂について思索をめぐらすようになります。医師である著者が魂の存在を体験的に認めていることがとても興味深いです。

肉体の死は理解できますが、魂はどうなのでしょう。現代の人は目に見えるものや科学的に証明できるものが全てだと捉えがちです。この本は、実は世界のほんの一部しか解明されていないことを教えてください。

「そんなことありえない！」

固定概念が覆され新しい視点に気づける一冊です。

◆丹羽隆浩にわりゅうこう

編集後記

今年は今和になって初めて迎えるお正月でしたが、帰省した実家では甥っ子姪っ子たちが去年と変わらず、走り回っていました。

少し目を離せば、すぐにケンカが始まっています。しばらくして静かになったと思ったら、ところ構わず寝てしまっている。そんな小さな怪物たちを見ると思っています。

「今を全力で生きていくっ！」
 開きっぱなしの本や散乱したおもちゃも証拠の一つです。自分の興味関心が原動力になり、あつちにこつちに・・・私もこのくらい活動的になりたいなと思いい、興味があった地域の演奏会を鑑賞しました。

新年を迎え、パワフルに過ごす甥っ子姪っ子に刺激を受け、気持ち新たにスタートを切りたいと思います！

◆菊地志門きくちしもん

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



二年度
秦 慧洲

願いの力

新たな年を迎えました。テレビでは大勢の方がお寺や神社にお参りし、手を合わせている様子が放映されていました。願いが込められるのは初詣の時だけではありません。色鮮やかなおせち料理の一つ一つには様々な願いが込められ、箱根駅伝を観ればタスキがつながることを願います。お正月はまさに日本中に人々の願いが巡る期間となっているのです。

呼ばれる作法を行います。経典をパラパラと広げる独特な作法で、見た目にもインパクトがある法要です。転読を終えると法要の導師が、参加者の名前と一年の願いを言葉にし、参加者も手を合わせます。たとえ幼い子どもであつても、隣にいる親の真似をしています。全員が同じことを一斉に行い、まるで時が止まったように感じるこの瞬間。私はいつも何物にも代えがたい幸福感を感じながら手を合わせています。

人任せにも思えるこの行為を「人の弱さ」と感じるかもしれません。願いは自分自身が努力しなければ意味がないんじゃないかと思うかもしれません。しかし、誰かに願いを託すことは単に楽をしているわけではありません。実は知らず知らずの内に自分の弱さと向き合い、覚悟を示しているからです。



ひさまっしょうげん 久松彰彦 こばなし の小噺

ルンビニ合掌苑に何うと、決まって丁度ラジオ体操の時間になっていて、軽快な音が聞こえてきます。体を動かすのはとても気持ちが良いですね。また毎朝決まったことをするというのも、身体にも心も安定させてくれそうです。私の日課は、お茶を淹れることです。まずはお湯を沸かしますが、その間にお寺の門や、本堂の雨戸を開けます。戻ってくると丁度お湯が沸く頃。沸騰したお湯を少し冷まし、急須に入れていきます。

このお茶は自分のためではなく、仏様へのお供えのためのものです。本尊様はもちろん、観音様、また大黒様や荒神様、お稲荷さんといった仏様・神様にもお供えします。全部合わせるとその数は二十以上になります。お供えの湯のみはあまり音を立てないように静かに置きます。心が乱れていたり、考え事をしてしていると「コツツ」という音がなってしまうので、注意しなければなりません。お供えをするごとに、その場所で静かに手を合わせて頭を下げます。